

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

—全国肢体不自由特別支援学校の「スヌーズレン教育」に視点を当てて—

姉崎 弘(常葉大学)

要旨

筆者は、特別支援学校における自立活動の一指導方法である「スヌーズレン教育」に着目して一貫した研究を行っている。肢体不自由特別支援学校でさまざまな自立活動の指導方法が用いられているが、どの程度活用されているのか、また教師の各指導方法の習得希望を調査により明らかにすることは、今後のこの教育の発展のために意義があり必要であると考えられる。そこで本稿では、グループ教師の回答を分析対象にして「スヌーズレン教育」を中心に、各指導方法の活用度や担当教師の習得希望を明らかにすることで、今後特に障害の重い自立Ⅱ類型の担当教師に求められる自立活動の指導方法を検討し特定した。その結果、先行研究の知見より「摂食訓練」「動作法」「理学療法」「感覚統合」「作業療法」「静的弛緩誘導法」「音楽療法」「ムーブメント教育」「スヌーズレン教育」の9つに、新たに「インリアル法」と「心理検査等の評価法」の2つを追加できると考えられた。

キーワード

重度・重複障害児、自立活動、指導方法、スヌーズレン、スヌーズレン教育

1. はじめに

これまで、障害の重い重度・重複障害児に求められる自立活動の指導方法・内容に関する調査研究はあまり多くは発表されていないのが現状である。たとえば、これまで発表された宮崎(1999)¹⁾や香野(2001)²⁾、中井・高野(2011)³⁾、姉崎(2019)⁴⁾および姉崎(2023)⁵⁾といった先行研究があげられる。

姉崎(2019)⁴⁾は、肢体不自由特別支援学校(分校・分教室を含む)の自立活動を主とする類型(以下、「自立活動類型」と記す)に所属する比較的「反応の豊かな」および「反応の乏しい」重度・重複障害児(寝たきりの要医療的ケア児である最重度児を含む)の自立活動の指導に関する質問紙調査を2012年に実施し、2019年にその調査結果の一部を発表している⁴⁾。この調査の際、学校における実際の分け方とは異なると思われるが、調査上便宜的に、自立活動類型に所属する重度・重複障害児を、比較的「反応の豊かなグループ」と比較的「反応の乏しいグループ」の2つに大別して各担当教師に調査を行った。

この研究では、自立活動類型のグループ教師が、最も重視している「自立活動の指導理論・技法」(以下、「自立活動の指導方法」と記す)、および習得し活用している指導方法の活用度、さらに今後担当教師に求められる指導方法として担当教師が「最も重視している指導方法」の中から特に6つの指導方法を抽出した。しかしこの最も重視している指導方法の検討だけからでは求められる指導方法を特定するのは無理がある。そこで、2023年にも2012年調査の継続研究を発表し、「個人教師の回答結果」に着目して、個人教師が重視している指導方法(活用度)、および個人教師が今後習得を希望する指導方法、

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

さらに今後重度・重複障害児担当教師に求められる指導方法を検討し、2019年に発表した「摂食訓練」「理学療法」「感覚統合」「静的弛緩誘導法」「音楽療法」「スノーズレン教育」の6つの指導方法の他に、「動作法」「作業療法」「ムーブメント教育」の3つを新たに追加した計9つの指導方法を明らかにした⁵⁾。このように筆者は重度・重複障害児に求められる自立活動の指導方法について一貫した研究を継続してきている。ただし、調査に用いた質問紙の調査項目が膨大になったため、数回に分けて継続的に発表してきている。

なお、これまで用いた「指導理論・技法」の用語を全て「指導方法」に置き換えて用いた。

そこで本稿では、2012年調査のさらに継続研究になるが、新たに「グループ教師の回答結果」にも着目して、グループ教師が習得し活用している指導方法、およびグループ教師が今後習得を希望する指導方法、さらにこれらの結果を基に今後重度・重複障害児担当教師に求められる指導方法の3つを検討することを目的とする。特に、2023年に発表した個人教師による回答結果が、グループ教師についても同様の結果になるのかどうか、について検証を行いたい。今日全国の肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒の障害が重度化、重複化している、本研究は、これからこの教育を担当する教師に自立活動の指導を実践する際の指針や示唆を与えるものであり、ここに本研究の意義があると考えている。

2. 方法

(1) 調査対象

調査は「全国特別支援学校実態調査」(全国特別支援学校長会,2011)の冊子に収録されている全国の肢体不自由特別支援学校(分校・分教室及び知肢併置の特別支援学校を含む)262校を対象とした。小学部・中学部・高等部の各学部の「知的障害代替の教育課程の知的障害代替類型(以下、「知的類型」と記す)」を担当するグループ教師の代表者、「自立活動を主とする教育課程の自立活動類型(表情・発声・動作等の反応が見られる児童生徒が在籍)(以下、「自立Ⅰ類型」と記す)」を担当するグループ教師の代表者、「自立活動を主とする教育課程の自立活動類型(表情・発声・動作等の反応の評価が困難な反応の極めて乏しい児童生徒が在籍(以下、「自立Ⅱ類型」と記す)」を担当するグループ教師の代表者、の全9類型(3学部×3類型)に回答していただいた。

今回学校現場の実際の類型の分け方とは異なる場合があると思われるが、本調査を実施する上で便宜的に重度・重複障害児が多く在籍している自立活動類型を、上記の自立Ⅰ類型と自立Ⅱ類型の2つに細かく大別して設定した。この内、特に反応の極めて乏しい重度・重複障害児は自立Ⅱ類型に分類される。ただし、調査は小学部・中学部のみ、および中学部・高等部のみ設置の学校の場合は6類型、高等部のみ設置の学校の場合は3類型をそれぞれ調査の対象とした。

(2) 手続きおよび調査期間

郵送法による質問紙調査を行った。質問紙は2012年1月に依頼文書とともに各学校に必要な部数(各学部各類型に1部ずつ)を送付し、2012年3月までに回収した。質問紙の回答は各学部の各類型を担当するグループ教師の代表者に依頼した。

(3) 調査項目と主な調査内容

本調査で用いた「自立活動の指導で活用している指導方法名とその活用度(3件法)および今後習得を希望する指導方法」に関する質問紙(一部抜粋)を図1-1に示した。主な調査

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

内容として以下の2つを設定した。

第一に、自立Ⅱ類型と自立Ⅰ類型および知的類型を担当する各グループ教師が自立活動の指導において習得し活用している指導方法とその活用度(3件法)。第二に、自立Ⅱ類型と自立Ⅰ類型および知的類型を担当する各グループ教師が今後習得を希望する指導方法。

なお、本調査に用いた調査項目の指導方法名は、宮崎(1999)¹⁾の調査項目を参考にして、その後調査実施の時点で新たに使用されていた主な指導方法として、「スヌーズレン教育」と「リマック」の2つを新たに追加して加筆修正し設定した。

(4) 分析

各質問項目ごとに欠損値を除いて集計・分析した。

<p>グループの先生方が、卒後習得した自立活動の指導に活用しうる指導方法を、以下の①～⑳の各項目の中からすべて選んで、該当する1～3の数字に○をつけて下さい。(1. よく活用している 2. 活用している 3. あまり活用していない)また、同じ各項目について、今後、新たに習得したり、または続けて活用したいと思う指導方法をすべて選んで、()に○をつけてください。</p> <p>①理学療法一般、②作業療法一般、③感覚統合、④知覚-運動訓練、⑤ボバース法、⑥ボイタ法、⑦動作訓練、⑧静的弛緩誘導法、⑨ドーマン法、⑩摂食訓練、⑪ムーブメント教育、⑫スヌーズレン(または感覚学習)、⑬ポータージ法、⑭リマック、⑮抱っこ法、⑯ベター法、⑰遊戯療法、⑱箱庭療法、⑲カウンセリング、⑳音楽療法、㉑行動療法、㉒絵画療法、㉓モンテッソーリ法、㉔インリアル法、㉕ムーブ、㉖ダンスセラピー、㉗乗馬療法、㉘心理検査等の評価法、㉙その他(), ㉚特になし ※上記の各項目の後に()が入る</p>

図 1-1 「自立活動の指導で活用している指導方法名とその活用度(3件法)および今後習得を希望する指導方法」に関する質問紙(一部抜粋)の概要(姉崎,2019⁴⁾(一部修正)より作成)

(5) スヌーズレン教育の定義

表 1-1 スヌーズレン教育の定義(姉崎,2013)⁶⁾

<p>「スヌーズレン教育とは、教室内を暗幕などでうす暗くし、対象児の好む光や音(音楽)、香りなどの感覚刺激を用いた多重感覚環境を教室内に設定して、その中で感覚刺激を媒介として教師と対象児および対象児同士が相互に共感し合い、心地よさや幸福感をもたらすことで、対象児のもつ教育的ニーズ(発達課題)のある感覚面や情緒面、運動面、コミュニケーション面などにおける心身の発達を促し支援する教育活動である」。</p>
--

(6) 倫理的配慮

本質問紙調査を実施する上で以下を配慮した。1)依頼書を学校長と回答する教師に、また質問紙を回答する教師に、それぞれ送付した。2)回答する教師に、回答に要するおよその所要時間とスヌーズレンの基本的な理解に必要な説明文を加えた。3)小学部で自立活動類型に所属し、スヌーズレン授業の実践経験を有するスヌーズレン授業に理解のある教師1名に質問紙への回答を依頼した。4)学校名および個人名の情報は守秘義務を守ること、5)後日研究結果を各学校に送付し研究論文として発表すること、を依頼書にそれぞれ明記し、6)質問紙調査への回答および研究者への回答結果の返送をもって本調査に承諾したものと見なした。なお、利益相反に関する開示事項はない。

3. 結果

(1) 質問紙回収率

表 1-2 より質問紙回収率は平均約 55%であった。全ての都道府県から回答があった。

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

表 1-2 調査対象の学部・類型および質問紙回収率

学部	類型	調査対象(件数)	回収数(回収率)
小学部	知的	210	114 (54.3%)
	自立 I	232	124 (53.4%)
	自立 II	233	129 (55.4%)
中学部	知的	203	107 (52.7%)
	自立 I	214	115 (53.7%)
	自立 II	213	112 (52.6%)
高等部	知的	183	101 (55.2%)
	自立 I	196	111 (56.6%)
	自立 II	194	112 (57.7%)
合計		1878	1025 (平均 54.6%)

以下の(2)および(3)の項目に示した全ての表において、本研究で主な分析対象にした「スヌーズレン教育」とその順位および総合順位を網掛けで示した。また(2)と(3)の各表に、図 1-1 の調査対象とした全 29 項目中の上位 15 位までの指導方法を示した。

(2)グループ教師が習得し活用している自立活動の指導方法

表 2-1 小学部・自立 II 類型の活用度

学部/類型	活用度	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
小学部 自立 II 類型	よく活用している	58	37	23	35	12	36	20	18	12	7	5	20	7	8	17	315
	順位	1	2	5	4	8	3	5	6	8	10	11	5	10	9	7	
小学部 自立 II 類型	活用している	40	42	63	58	51	34	46	46	51	28	35	24	40	36	22	616
	合計	98	79	86	93	63	70	66	64	63	35	40	44	47	44	39	931
	総合順位	1	4	3	2	8	5	6	7	8	13	11	10	9	10	12	

表 2-2 小学部・自立 I 類型の活用度

学部/類型	活用度	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
小学部 自立 I 類型	よく活用している	53	33	21	22	17	20	7	10	7	6	6	10	6	2	6	226
	順位	1	2	4	3	4	5	6	7	6	8	8	7	8	9	8	
小学部 自立 I 類型	活用している	41	54	46	57	47	43	50	48	41	44	25	32	27	23	10	588
	合計	94	87	67	79	64	63	57	58	48	50	31	42	33	25	16	814
	総合順位	1	2	4	3	5	6	8	7	10	9	13	11	12	14	15	

表 2-3 小学部・知的類型の活用度

学部/類型	活用度	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
小学部 知的類型	よく活用している	35	34	22	19	20	24	7	15	3	8	6	10	5	9	4	221
	順位	1	2	4	6	5	3	11	7	15	10	12	8	13	9	14	
小学部 知的類型	活用している	40	37	42	43	40	23	35	26	35	33	26	25	26	18	10	459
	合計	75	71	64	62	60	47	42	41	38	41	32	35	31	27	14	680
	総合順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	8	11	10	12	13	14	

表 2-4 中学部・自立 II 類型の活用度

学部/類型	活用度	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
中学部 自立 II 類型	よく活用している	48	38	20	16	12	19	13	13	12	5	6	14	6	4	5	231
	順位	1	2	3	5	8	4	7	7	8	10	9	6	9	11	10	
中学部 自立 II 類型	活用している	50	39	49	56	46	38	34	29	39	26	23	18	15	14	12	488
	合計	98	77	69	72	58	57	47	41	51	31	29	32	21	18	17	718
	総合順位	1	2	4	3	5	6	8	9	7	11	12	10	13	14	15	

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

表 2-5 中学部・自立 I 類型の活用度

学部/類型	活用度	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
中学部 自立 I 類型	よく活用している	43	30	14	13	14	16	12	9	7	7	6	13	7	5	4	200
	順位	1	2	4	6	5	3	7	8	9	9	10	6	9	11	12	
中学部 自立 I 類型	活用している	42	53	54	53	53	37	38	29	29	28	29	23	26	20	12	526
	合計	85	83	68	66	67	53	50	38	36	35	35	36	33	25	16	726
	総合順位	1	2	3	5	4	6	7	8	9	10	10	9	11	12	13	

表 2-6 中学部・知的類型の活用度

学部/類型	活用度	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
中学部 知的類型	よく活用している	25	20	14	10	12	11	12	3	2	6	6	4	6	4	4	139
	順位	1	2	3	6	4	5	4	9	10	7	7	8	7	8	8	
中学部 知的類型	活用している	39	46	51	42	48	30	23	22	21	28	16	15	11	18	6	416
	合計	64	66	65	52	60	41	35	25	23	34	22	19	17	22	10	555
	総合順位	3	1	2	5	4	6	7	9	10	8	11	12	13	11	14	

表 2-7 高等部・自立 II 類型の活用度

学部/類型	活用度	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
高等部 自立 II 類型	よく活用している	49	29	25	20	12	20	18	9	12	9	9	9	6	6	8	241
	順位	1	2	3	4	6	4	5	7	6	7	7	7	9	9	8	
高等部 自立 II 類型	活用している	38	46	41	40	38	40	31	24	33	21	16	22	14	13	16	433
	合計	87	75	66	60	50	60	49	33	45	30	25	31	20	19	24	674
	総合順位	1	2	3	4	5	4	6	8	7	10	11	9	13	14	12	

表 2-8 高等部・自立 I 類型の活用度

学部/類型	活用度	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
高等部 自立 I 類型	よく活用している	44	29	17	22	14	17	14	11	15	9	9	11	5	4	9	230
	順位	1	2	4	3	5	4	6	7	5	8	8	7	9	10	8	
高等部 自立 I 類型	活用している	39	49	58	50	55	36	45	32	30	16	29	16	23	24	12	514
	合計	83	78	75	72	69	53	59	43	45	25	38	27	28	28	21	744
	総合順位	1	2	3	4	5	7	6	9	8	13	10	12	11	11	14	

表 2-9 高等部・知的類型の活用度

学部/類型	活用度	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
高等部 知的類型	よく活用している	23	24	16	8	9	11	8	6	3	8	7	7	5	9	4	148
	順位	2	1	3	6	5	4	6	8	10	6	7	7	9	5	10	
高等部 知的類型	活用している	37	44	42	41	48	27	25	21	13	27	27	12	24	32	2	422
	合計	60	68	58	49	57	38	33	27	16	35	34	19	29	41	6	570
	総合順位	2	1	3	5	4	7	10	12	14	8	9	13	11	6	15	

グループ教師が習得し活用している指導方法について、回答数の多かった順位と総合順位の結果を以下に述べる。「スヌーズレン教育」については、表 2-1 で、小学部では、自立 II 類型(以下、「自立 II」と記す)の「よく活用している(以下、「よく活用」と記す)」が 8 位、「活用している」と合わせた総合順位が 8 位であった。なお、ここでは、「活用している」の順位は記さなくても、「よく活用している」の活用度(数値)と総合順位のみを記すことで、この両者から全体の活用傾向を総合的に把握できると考えた。

また「スヌーズレン教育」については、小学部では、表 2-2 で、自立 I 類型(以下、「自立 I」と記す)の「よく活用」が 6 位、総合順位が 10 位であった。表 2-3 で、知的類型の「よく活用」が 15 位、総合順位が 9 位であった。中学部では、表 2-4 で、自立 II の「よく活用」が 8 位、総合順位が 7 位であった。表 2-5 で、自立 I の「よく活用」が 9 位、総

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

合順位が 9 位であった。表 2-6 で、知的類型の「よく活用」が 10 位、総合順位が 10 位であった。高等部では、表 2-7 で、自立Ⅱの「よく活用」が 6 位、総合順位が 7 位であった。表 2-8 で、自立Ⅰの「よく活用」が 5 位、総合順位が 8 位、表 2-9 で、知的類型の「よく活用」が 10 位、総合順位が 14 位であった。

(3) グループ教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法

表 3-1 小・中・高等部教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法

類型/順位	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚一運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
自立Ⅱ類型	138	118	134	130	110	104	114	72	111	47	46	50	27	16	27	1244
順位	1	4	2	3	7	8	5	9	6	11	12	10	13	14	13	
自立Ⅰ類型	127	128	121	116	120	107	114	65	81	58	54	50	43	37	25	1246
順位	2	1	3	5	4	7	6	9	8	10	11	12	13	14	15	
知的類型	99	94	104	81	104	65	75	37	48	69	45	31	32	43	19	946
順位	2	3	1	4	1	7	5	11	8	6	9	13	12	10	14	
合計	364	340	359	327	334	276	303	174	240	174	145	131	102	96	71	3436
総合順位	1	3	2	5	4	7	6	9	8	9	10	11	12	13	14	

表 3-2 小学部教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法

類型/順位	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚一運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
自立Ⅱ類型	56	45	55	53	47	43	44	36	47	18	21	24	9	8	12	518
順位	1	5	2	3	4	7	6	8	4	11	10	9	13	14	12	
自立Ⅰ類型	52	46	43	44	42	43	41	33	32	24	21	19	15	13	6	474
順位	1	2	4	3	5	4	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
知的類型	34	36	35	36	32	27	30	16	21	25	18	12	14	12	10	358
順位	3	1	2	1	4	6	5	10	8	7	9	12	11	12	13	
合計	142	127	133	133	121	113	115	85	100	67	60	55	38	33	28	1350
総合順位	1	3	2	2	4	6	5	8	7	9	10	11	12	13	14	

表 3-3 中学部教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法

類型/順位	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚一運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
自立Ⅱ類型	43	38	39	41	23	33	35	17	33	34	8	10	13	9	4	380
順位	1	4	3	2	8	7	5	9	7	6	13	11	10	12	14	
自立Ⅰ類型	41	43	35	31	35	31	35	16	23	23	20	13	16	15	12	389
順位	2	1	3	4	3	4	3	7	5	5	6	9	7	8	10	
知的類型	32	29	36	25	33	20	18	10	13	21	14	8	8	15	6	288
順位	3	4	1	5	2	7	8	12	11	6	10	13	13	9	14	
合計	116	110	110	97	104	91	88	43	69	78	42	31	37	39	22	1057
総合順位	1	2	2	4	3	5	6	9	8	7	10	13	12	11	14	

表 3-4 高等部教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法

類型/順位	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚一運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
自立Ⅱ類型	39	35	40	36	31	28	35	19	30	18	11	13	9	4	8	356
順位	2	4	1	3	5	7	4	8	6	9	11	10	12	14	13	
自立Ⅰ類型	34	39	43	41	43	33	38	16	26	14	20	15	13	12	13	400
順位	5	3	1	2	1	6	4	9	7	11	8	10	12	13	12	
知的類型	33	29	33	20	39	18	28	11	14	23	13	10	10	16	3	300
順位	2	3	2	6	1	7	4	11	9	5	10	11	12	8	13	
合計	106	103	116	97	113	79	101	46	70	55	44	38	32	32	24	1056
総合順位	3	4	1	6	2	7	5	10	8	9	11	12	13	13	14	

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

表 3-5 自立Ⅱ類型教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法

学部/順位	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
小学部	56	45	55	53	47	43	44	36	47	18	21	24	9	8	12	518
順位	1	5	2	3	4	7	6	8	4	11	10	9	13	14	12	
中学部	43	38	39	41	23	33	35	17	33	34	8	10	13	9	4	380
順位	1	4	3	2	8	7	5	9	7	6	13	11	10	12	14	
高等部	39	35	40	36	31	28	35	19	30	18	11	13	9	4	8	356
順位	2	4	1	3	5	7	4	8	6	9	11	10	12	14	13	
合計	138	118	134	130	101	104	114	72	110	70	40	47	31	21	24	1254
総合順位	1	4	2	3	8	7	5	9	6	10	12	11	13	15	14	

表 3-6 自立Ⅰ類型教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法

学部/順位	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
小学部	52	46	43	44	42	43	41	33	32	24	21	19	15	13	6	474
順位	1	2	4	3	5	4	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
中学部	41	43	35	31	35	31	35	16	23	23	20	13	16	15	12	389
順位	2	1	3	4	3	4	3	7	5	5	6	9	7	8	10	
高等部	34	39	43	41	43	33	38	16	26	14	20	15	13	12	13	400
順位	5	3	1	2	1	6	4	9	7	11	8	10	12	13	12	
合計	127	128	121	116	120	107	114	65	81	61	61	47	44	40	31	1263
総合順位	2	1	3	5	4	7	6	9	8	10	10	11	12	13	14	

表 3-7 知的類型教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法

学部/順位	摂食訓練	動作法	理学療法	感覚統合	作業療法	静的弛緩誘導法	音楽療法	ムーブメント教育	スヌーズレン教育	心理検査等の評価法	知覚-運動訓練	インリアル法	行動療法	カウンセリング	リマック	合計
小学部	34	36	35	36	32	27	30	16	21	25	18	12	14	12	10	358
順位	3	1	2	1	4	6	5	10	8	7	9	12	11	12	13	
中学部	32	29	36	25	33	20	18	10	13	21	14	8	8	15	6	288
順位	3	4	1	5	2	7	8	12	11	6	10	13	13	9	14	
高等部	33	29	33	20	39	18	28	11	14	23	13	10	10	16	3	300
順位	2	3	2	6	1	7	4	9	9	5	10	11	11	8	12	
合計	99	94	104	81	104	65	76	37	48	69	45	30	32	43	19	946
総合順位	2	3	1	4	1	7	5	11	8	6	9	13	12	10	14	

次に、グループ教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法について、以下に結果を述べる。回答数の多かった順位として、「スヌーズレン教育」については、表 3-1 で、小・中・高等部全体では、自立Ⅱが 6 位、自立Ⅰが 8 位、知的が 8 位、総合順位が 8 位であった。学部別で、表 3-2 で、小学部では、自立Ⅱが 4 位、自立Ⅰが 8 位、知的が 8 位、総合順位が 7 位であった。表 3-3 で、中学部では、自立Ⅱが 7 位、自立Ⅰが 5 位、知的が 11 位、総合順位が 8 位であった。表 3-4 で、高等部では、自立Ⅱが 6 位、自立Ⅰが 7 位、知的が 9 位、総合順位が 8 位であった。一方、類型別では、表 3-5 で、自立Ⅱでは、小学部が 4 位、中学部が 7 位、高等部が 6 位、総合順位が 6 位であった。表 3-6 で、自立Ⅰでは、小学部 8 位、中学部 5 位、高等部 7 位、総合順位が 8 位であった。表 3-7 で、知的では、小学部が 8 位、中学部が 11 位、高等部が 9 位、総合順位が 8 位であった。

4. 考察

(1) グループ教師が習得し活用している自立活動の「スヌーズレン教育」の指導方法

先行研究(姉崎,2023)⁵⁾では、同様の調査結果を個人教師の回答結果を元に分析した。それによると、教師が習得し活用する自立活動の「スヌーズレン教育」の指導方法は、個人教師の回答では小・中・高等部の総合順位が 8 位であった。一方、今回のグループ教師

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

の回答では、総合順位が同じく 8 位であった。また自立Ⅱ類型に着目すると、個人教師の回答では小・中・高等部の「スヌーズレン教育」の総合順位が 8 位で、今回のグループ教師の回答では総合順位が 6 位となり順位を 2 つ上げた。従って、グループ教師では、「スヌーズレン教育」がより多く活用されていた。特別支援学校の場合、グループ全体の教師が話し合い授業を行う場合が多いため、グループ教師の回答は、グループ全員の意見が反映されるため、個人教師の回答の偏りがちな意見よりは信頼性が高いと考えられる。

「スヌーズレン教育」は、小学部では総合順位が、自立Ⅱ類型では 8 位、自立Ⅰ類型では 10 位、知的類型では 9 位であった。中学部では総合順位が、自立Ⅱ類型では 7 位、自立Ⅰ類型で 9 位、知的類型で 10 位であった。高等部では総合順位が、自立Ⅱ類型では 7 位、自立Ⅰ類型では 8 位、知的類型で 14 位となり、障害が重い類型ほど活用されていた。

以上の結果より、障害の重い対象児が在籍している自立Ⅱ類型に関しては、「スヌーズレン教育」が自立活動の指導方法の中で、各学部において 7 位～8 位を占めた。また自立Ⅱ類型に比べて知的類型では、中学部と高等部の順位がそれぞれ 11 位と 9 位となり、順位が全体的に低くなり、教師の活用が低くなる傾向が見られた。この結果は、障害の重い自立Ⅱ類型や自立Ⅰ類型に比べて、障害が比較的軽い知的類型では、「スヌーズレン教育」の指導方法を授業の中でそれ程活用していないと考えられる。このことは、換言すれば、障害の重い自立Ⅱ類型や自立Ⅰ類型を担当する教師ほど、「スヌーズレン教育」の指導方法を活用していたといえる。従って、肢体不自由特別支援学校では、障害の重い対象児の授業で、「スヌーズレン教育」の指導方法がよく活用されていたといえる。

なお、2019 年の先行研究⁴⁾で、自立Ⅱ類型で自立活動の指導で最も活用している指導方法の一つとして「リマック」が取り上げられたが、本研究の結果から、各学部・各類型における「リマック」の活用度の総合順位が 12 位から 15 位となり、あまり活用されていない結果となり、「リマック」は求められている指導方法には該当しないと考えられた。

(2) グループ教師が今後習得を希望する自立活動の「スヌーズレン教育」の指導方法

先行研究(姉崎,2023)⁵⁾において、個人教師の回答では、今後教師が習得を希望する指導方法として「スヌーズレン教育」は、小・中・高等部の総合順位は 8 位で、自立Ⅱ類型では 7 位であった。一方、今回のグループ教師の回答では、表 3-1 で小・中・高等部の総合順位は同じ 8 位であった。表 3-2 で小学部では、総合順位は 7 位であるが、特に自立Ⅱ類型では 4 位になり、特に小学部教師の習得希望のニーズが高くなった。また表 3-5 で自立Ⅱ類型では総合順位は 6 位であった。この結果から、グループ教師の回答では、個人教師の回答に比べて「スヌーズレン教育」の習得ニーズは順位を 1 つ上げ、教師の習得希望が高くなったといえる。一方、知的類型では、表 2-7 で中学部の総合順位が 11 位、高等部の総合順位が 9 位となり、小学部に比べて習得希望のニーズとしては低くなったといえる。

上記の小学部の自立Ⅱ類型担当教師が、今後「スヌーズレン教育」の習得を希望するニーズが特に高くなった理由として以下が考えられる。乳幼児の脳神経の発達には直接脳に伝わる刺激が重要で、そのためには特に五感を刺激することが有効である⁷⁾といわれるため、重度・重複障害児にもこの考え方は同様に適用することができると考えられる。それは五感を心地よく刺激する指導方法であるスヌーズレン教育の授業は、特に発達初期にある小学部段階の重度・重複障害児の発達を促す上で有効であると推察されるからである。

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

以上の結果より、特に障害の重い対象児が在籍している自立Ⅱ類型に関しては、「スヌーズレン教育」が自立活動の指導方法の中で、小学部が4位、中学部が7位、高等部が6位をそれぞれ占めたことから、学部間の比較では、小学部の自立Ⅱ類型担当教師の「スヌーズレン教育」の指導方法に対する習得希望のニーズが最も高くなったといえる。2023年の先行研究⁵⁾の個人教師の回答結果では、自立Ⅱ類型において学部ごとの習得希望ニーズの順位を明らかにしていないことから、今回のこの結果は新たな知見といえる。

(3) 今後重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の特定

先行研究(姉崎,2023)⁵⁾において、個人教師による回答結果から、今後重度・重複障害児担当教師に求められる指導方法として、「摂食訓練」「動作法」「理学療法」「感覚統合」「作業療法」「静的弛緩誘導法」「音楽療法」「ムーブメント教育」「スヌーズレン教育」の9つを抽出した。本研究でも、各表において示したグループ教師による各指導方法の活用度および今後の習得希望の回答結果を総合して、同様に上記の9つの指導方法が今後重度・重複障害児担当教師に求められていると考えられた。

以下に、上記の9つ以外の主な指導方法が今後担当教師に求められるかどうかについて検討を行う。まず各学部の自立Ⅱ類型における教師の習得希望の指導方法として、表3-2で、小学部の「インリアル法」が計24で順位9位、「知覚-運動訓練」が計21で順位10位、「心理検査等の評価法」が計18で順位11位、表3-3で、中学部の「心理検査等の評価法」が計34で順位6位、「インリアル法」が計10で順位11位、「知覚-運動訓練」が計8で順位13位、表3-4で、高等部の「心理検査等の評価法」が計18で順位9位、「インリアル法」が計13で順位10位、「知覚-運動訓練」が計11で順位11位であった。先行研究⁵⁾において、自立Ⅱ類型の個人教師の習得した指導方法として「インリアル法」が10位、「心理検査等の評価法」が11位であった(図8参照)。また同先行研究において、小・中・高等部の自立Ⅱ類型の個人教師が習得を希望する指導方法として「インリアル法」が10位、「心理検査等の評価法」が11位、「知覚-運動訓練」が12位であった。

したがって、以上の結果から、これまでの9つの指導方法を基本的に踏まえた上で、学部によってそのニーズに多少相違は認められるが、担当教師の活用度と今後の習得希望数の計と順位の結果を基に総合的に判断すると、「インリアル法」と「心理検査等の評価法」の2つを新たに追加して11にすることができると考えられる。

この新たに追加された「インリアル法」と「心理検査等の評価法」について考察する。今日障害の重い対象児に、教師が「インリアル法」で、対象児へのコミュニケーションの指導として教師自身がその援助の方法を学んだり、また「心理検査等の評価法」で、対象児にアセスメント等の評価を行って実態を把握して、指導計画に生かすスキルも重要である。特に「心理検査等の評価法」は、直接授業の中で用いる指導方法とは異なるが、自立活動の指導を実施する上で、対象児の実態把握や指導の評価を行うために担当教師に不可欠な指導技法である。従って、両者は今日担当教師に求められていると考えられる。

5. まとめと今後の課題

上記の結果より、「スヌーズレン教育」の活用度に関しては、個人教師の回答とグループ教師の回答では、ほぼ同じような結果が得られた。一方、今後の習得希望に関しては、

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法の考察

全体的に、知的類型を除いて、自立Ⅱ類型と自立Ⅰ類型のグループ教師の方が個人教師よりも、今後習得を希望する教師が多い傾向が見られた。

以上の結果を総合すると、結論として、障害の重い自立Ⅱ類型を担当する教師に求められる自立活動の指導方法として、個人教師の回答結果に基づく「摂食訓練」「動作法」「理学療法」「感覚統合」「作業療法」「静的弛緩誘導法」「音楽療法」「ムーブメント教育」「スヌーズレン教育」の9つの他に、「インリアル法」と「心理検査等の評価法」の2つを新たに追加して11にすることができると考える。また12番目に「知覚－運動訓練」があげられる。ただし、これらの結果は2012年の調査の分析結果であり、それ以降に新たに加わった最新の指導方法を分析対象に加えていないことに十分留意する必要がある。

本研究では、重度・重複障害児を担当する教師に求められる自立活動の指導方法として、新たに11の指導方法を抽出し特定した。これらの指導方法を一人ひとりの教師がすべて習得することは不可能に近いと考えられる。そのような理解の仕方ではなく、これらの特定した指導方法を参考にして、各教師が自分の得意とする複数の指導方法を見出して専門的な研修を積み指導方法に精通することで、教師個人として、また教師集団として、自立活動の指導実践の質を高め、対象児一人ひとりのさまざまな教育的ニーズに即して的確な指導を展開することのできる指導力量を形成することが何よりも重要であると考えられる。

最後に、今後の課題として以下があげられる。前回調査から2023年で約10年が経過することから、再度、最新の自立活動の指導方法を精査し新たな質問紙を作成して、全国の肢体不自由特別支援学校を対象に同様の調査を実施して、今日的に障害の重い対象児を担当する教師に求められている最新の自立活動の指導方法を検討し特定する必要がある。

謝辞

本研究にご協力を賜った全国肢体不自由特別支援学校の先生方にお礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 宮崎 昭(1999)肢体不自由養護学校の養護・訓練に関する調査.肢体不自由教育,144, 22-27.
- 2) 香野 毅(2001)肢体不自由養護学校における自立活動.静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇),33,265-273.
- 3) 中井 滋・高野 清(2011)特別支援学校(肢体不自由)における自立活動の現状と課題(I).宮城教育大学紀要,46,173-183.
- 4) 姉崎 弘(2019)重度・重複障害児に求められる自立活動の指導理論・技法及び指導内容に関する調査－全国の肢体不自由特別支援学校への質問紙調査を通して－.兵庫教育大学教育実践学論集,56(20),59-72.
- 5) 姉崎 弘(2023)重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法－全国肢体不自由特別支援学校への質問紙調査から－.常葉大学教育学部紀要,43,193-207.
- 6) 姉崎 弘(2013)わが国におけるスヌーズレン教育の導入の意義と展開.特殊教育学研究,51(4),369-379.
- 7) 成田奈緒子(2009)脳と心の発達メカニズム;五感の刺激の大切さ.乳幼児期からの子供の教育支援プロジェクト.東京都教育委員会,4-14.